

国際教育センター長 殿
To Director, Center for Global Education and Exchange

ストラスブール大学への短期訪問研究員報告書
Research Report by Visiting Researcher to University of Strasbourg

氏名 Name	葛西 耕介 Kosuke KASAI
所属・職名（身分） Affiliation and position	東洋大学文学部教育学科・准教授 TOYO UNIVERSITY, Faculty of Letters, Department of Education, Associate Professor,
研究課題名 Research topic	フランスの学校運営における親の参加と校長の役割 Parental participation and the role of headteacher in school administration in France
研究期間 Research period	2026年 3月 2日～ 2026年 3月21日（移動日含む） From 2026/3/2 to 2026/3/21
研究協力教員氏名（所属） Research partner (affiliation)	ナジョア・モヒブ（ストラスブール大学 教育発達科学教授） Najoua Mohib (Université de Strasbourg, Professeure de sciences de l'éducation et de la formation)
実施講義①専門家向け （日時・テーマ・概要） ① Specialized Lecture (Date, Theme, Overview)	時間の調整がつかず未実施。 Not implemented due to scheduling constraints
実施講義②一般向け （日時・テーマ・概要） ② General Lecture (Date, Theme, Overview)	2026年3月5日、日仏大学会館にて。「日本の教育」。日本の教育の国際比較的特徴を、高学力、特別活動、部活に焦点を当て紹介・分析した。 5 March 2026. Conférence JSPS-MUFJ #294 <i>School Education in Japan</i> . An introduction and analysis of Japanese education and its internationally comparative features, with emphasis on high academic achievement, special activities, and club activities.
研究成果 research achievements	A4用紙2ページ以上 申請時に提出した内容を踏まえ、ご記入ください。

研究成果報告書

文学部 教育学科 葛西 耕介

1. はじめに

本報告書では、報告者が 2026 年 3 月 2 日から 2026 年 3 月 21 日までの 3 週間滞在した、フランス共和国ストラスブール大学での短期訪問研究の研究成果について報告する。

2. 研究主題

派遣期間中の研究課題は、「フランスの学校運営における親の参加と校長の役割」である。

報告者はこれまで学校運営への父母参加の思想と制度の研究に取り組み（『学校運営と父母参加——対抗する《公共性》と学説の展開』東京大学出版会、2023 年）、近年は、それを発展させる形で、学校経営における校長の職能の特定と、その職能の開発方法に関心を持って研究を進めている。

すなわち、日本において校長職は免許・資格化されておらず、教師・教員と異なるその固有の力量・職能についての社会的・学術的な合意が成熟しているとは言えず、したがって、校長を養成するカリキュラムも開発されるに至っていない。しかし、国際比較的に見た場合、校長の専門職基準が公的に策定され、それに基づきカリキュラムが策定され、職能団体や大学によって校長の職能開発が行われている。報告者は、イギリスについてその実態をすでに調査し明らかにしてきた（「イギリスにおける校長の養成および職能開発—全国校長資格(NPQH)プロバイダー、大学院、自治体へのインタビュー調査から—」『東洋大学文学部紀要教育学科編』、2026 年）。もっとも、より俯瞰的・国際比較的な観点から、日本における校長の職能開発について示唆を得るためには、イギリスのほか、同様に近年校長の職能開発の仕組みを整備しつつある国において、その実態を明らかにする必要がある。そこで、本短期訪問研究では、フランスにおける校長の役割とその校長の職能の開発の実態を、学校や校長養成機関を訪問して聴き取り調査等を行うことで、明らかにすることに目的を置いた。

3. 訪問中の活動の概要

(1) 学校訪問による観察と聴き取り調査

3 週間の訪問期間中に、小学校 (Ecole élémentaire) 2 校、中学校 (Collège) 2 校、高校 (Lycée) 1 校、小中高一貫校 1 校、の計 6 校を訪問することができた。また、それらの学校で、校長 (directeur d'école/principal/proviseur) 3 人、副校長 (proviseure adjointe) 1 人に対して聴き取り調査をすることができた。

聴き取りの概要は、①学校に関しては、学級規模、特別支援教育、授業スタイル、教員研修、教師以外の専門職の職種、勤務スタイルなどについてである。また、②児童・生徒に関しては、原級留置・飛び級や不登校の実態、親と生徒の参加制度 (学校運営委員会 Conseil d'administration) などについてである。そして、③校長に関しては、仕事の概要、校長前

後の一般的なキャリア、資格や学位、校長試験（concours）や採用の仕組み、人事異動の仕組み、研修の仕組み、校長の力量と職務、教育行政機関（inspector de academy）との関係性、などについてである。

（２）国立校長研修機関（IH2EF）への訪問と聴き取り調査

ストラスブールからもパリからも離れたフランス南西部のポワティエに、国立校長研修機関である IH2EF（Institut des Hautes Études de l'Éducation et de la Formation）が置かれており、フランスにおいては校長試験（国家試験）に合格した者は、まずこの機関で宿泊を伴う集中的な研修を受ける仕組みになっている。この機関ではこうした初任者研修のほか、オンライン形式も含め、多様な研修プログラムを提供しており、フランスにおける校長養成を理解するにはこの機関の活動の実態を把握することが不可欠である。そこで、IH2EF に実際に訪問して、施設見学を案内していただくとともに、ウェブサイトの情報からは得られない、当機関設立の歴史的経緯、人員体制、仕組み、取り組み、施設設備、研修プログラムの内容と形式等を、2 時間にわたり担当者から聴き取った。

（３）リーダーシップセミナーへの参加

滞在期間中である 3 月 16 日から 18 日にかけて、ストラスブール大学にて、校長の在り方を主題とする学会類似の国際研究集会である、Programme for the International Seminar on School Leadership が開催されており、これに参加した。主催は、欧州教育リーダーシップネットワーク（the European Network on Educational Leadership）と上記の国立校長研修期間である IH2EF である。同セミナーでは、ヨーロッパの国々から校長研究者や実務家が 150 人ほど集い、教育の変革について探究し、報告・講演し、ディスカッションを行った。ノルウェイ、イギリス、カナダ、アメリカでの校長を取り巻く実情や校長研究の現状などについて情報が得られるものであり、非常に貴重な機会となった。

フランスの校長研究者であり、本セミナーの開催校であるストラスブール大学の Romuald Normand 博士からは、フランスの校長研究についての資料の提供を受けるとともに、フランスの校長の在り方の特徴についてやり取りをする機会を得た。また、以前に交流のあったフィンランドの研究者とも再開し、ディスカッションをした。

（４）講演とディスカッション

滞在中の 3 月 5 日には、日仏大学会館にて MUFJ（日仏大学会館）と JSPS（日本学術振興会ストラスブール研究連絡センター）が共催するセミナーで、“School Education in Japan” と題した一般向け講演を行い、参加者との質疑応答、ディスカッション、情報交換をする機会を得た。報告では、日本の学校教育の国際比較的な特徴について、高学力、特別活動、部活に焦点を当てデータや写真を示しながら紹介・分析した。聴講者は 40 人ほどであり、主として日本に関心を持つフランス人であり、なかには現職教師やストラスブール大

学の学生もいた。質疑応答では日本の教育への深い関心が示され、講演と合わせて 90 分近く、興味深い日仏比較のディスカッションを行った。

(5) 大学院生との交流

報告者が滞在中に在籍したのはストラスブール大学内の教員養成部門 (INSPE) である。フランスでは近年、教員養成は学部ではなく大学院レベル (修士課程) で行っており、このセクションが教員養成を担っている。また、ここには、教育学を研究する博士課程の院生も在籍している。そこで、こうした大学院生 (現職学校教員も含む) とフランスの学校教育について、また大学教育について、情報交換・ディスカッションをすることができた。また、教員養成の授業にも一部参加し発言した。

4. おわりに

3 週間という短期の訪問であり、聴き取りを行えた人数も少ないという限界はあるものの、充実した調査研究の機会となった。本調査研究の成果は、2026 年度内に論文にまとめる予定である。フランスにおける校長養成の法制的仕組みやその実態を明らかにする研究は、少なくとも邦文ではほとんど存在しない中、日本の校長養成にとって新規の知見や示唆の提示が可能になるであろう。

充実した研究を可能にした環境を提供してくださった、ストラスブール大学と東洋大学による支援に心からの感謝を申し上げる。